

国立天文台・天文情報センター・特別客員研究員 中桐正夫

**\* 迷彩色が施された 65 cm望遠鏡ドーム**

今まで 65 cm望遠鏡ドームについては何度も記事にしてきた。しかし今回 1947 年ころの東京天文台の記事の載ったアーカイブ新聞を求められ、65 cm望遠鏡ドームが迷彩色に塗られていた記事を書いたように思うから、それも提供しようと言ったのだが、探してもそのような記事が出てこない。そうなら、戦時中に迷彩色が施された 65 cm望遠鏡ドームについては記事にしておかなければならないと思った。検索にかからないし、製本済みのアーカイブ新聞のページをめくっても出てこないで、今回記事にしておきたい。

もっとも製本されたアーカイブ室新聞は 650 号までであり、現在 934 号を執筆中であるから、この間に記事にしたかもしれないが、すでに記事にしていたらご容赦いただきたい。

写真 1 が戦時中迷彩色を施していた 65 cm望遠鏡ドームである。もっともこの時代には 65 cm望遠鏡とは言わず「26 吋屈折望遠鏡」と呼んでいた。

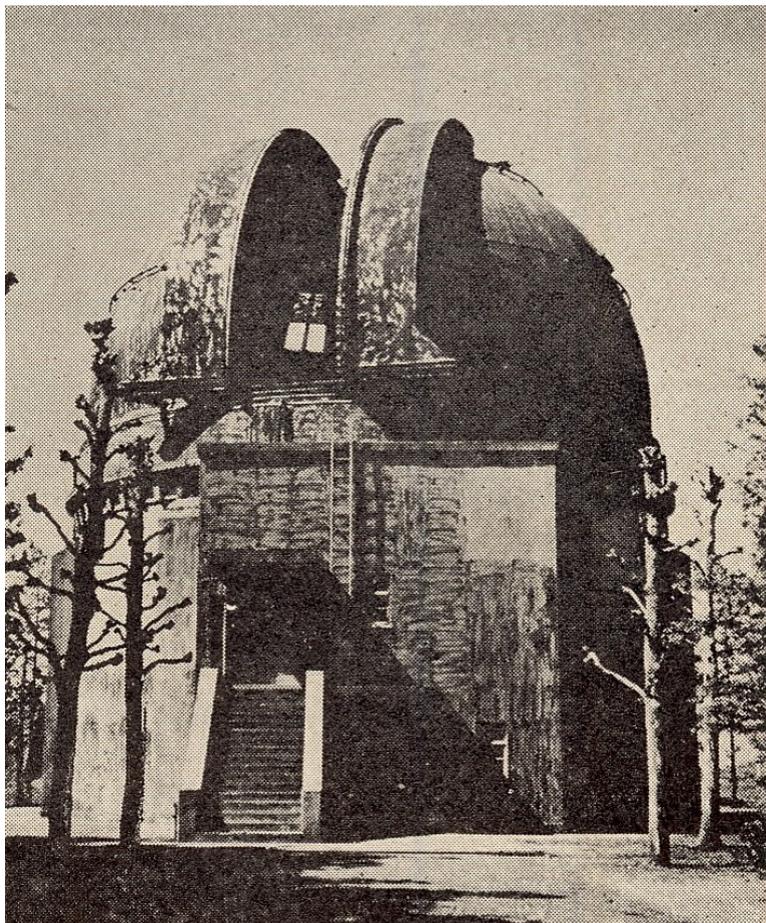


写真 1 迷彩色を施された 65 cm望遠鏡ドーム

東京天文台のすぐ近くには大日本帝国陸軍の調布飛行場、中島飛行機の工場などがあり、爆撃されることは容易に想像された。ドームを迷彩色に塗っただけではなく、望遠鏡の対物レンズは外され、地下室（望遠鏡観測床の階下の地下部分）に保管されていた。

東京天文台構内にはいくつかの爆弾が投下され、数個の不発弾が埋まっていると伝えられている。また、天文台のがけ地には今でも開口を開いた防空壕の跡がいくつか残っている。1か所はバス通りから見える位置にある。確かなことは分からないが東京天文台の地下には地下壕が張り巡らされているとの話もあり、時々陥没が発生するのも事実である。

平和な現在には似つかわしくないが、戦争の時代とはそのような時代であった。東京天文台も望遠鏡はレンズが外され観測どころではなかった時代であった。それでも東京天文台は日本の時刻を決める、編暦という事業があったから、子午儀による時刻観測、編暦計算は行われていたはずである。

東京天文台 75 周年誌には、「65 cm 望遠鏡を始め、大部分の望遠鏡主要部分、器械類はすべて地下へ移され、暦計算を始め研究室はその主任の官舎の一間が庁舎として提供され、事務室には当時の木工場倉庫を充てるなどという窮迫した状態となった。このころから 2 月 19 日の爆撃被弾をはじめ、小型機の銃撃をしばしばこうむり、4 月 12 日には構内国際報時所の 60m 鉄塔 4 基が陸軍の命令によって倒された。疎開の計画はしばしば立てられたがいずれも不調となり、最後に長野県信濃境へ報時、編暦を中心として大部分が移る計画が実施される直前に終戦を迎えた」と記されている。

このような困難な時期があったことは夢のような昨今ではある。こういった記事を書くとき、戦後の東京天文台の復興に尽くされた第五代萩原雄佑台長を思うのである

これらアーカイブ新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、[arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp](mailto:arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp)